士朗續七祁集

中

志なくなり

110769815

枇杷園の重籠に以
ぼき合せる洗のこ
おさりあへる試を試
志ぶうとりも文集こゝ
不卜菓にふるりの
筆にかき志るし故

志ぶうぐる里

嵐山ハ片雲の身の上之事の枕の花
なりにあるにけるに人ハ月雲を栖
とし月雲ハ百代の過客にして
けるに花をも旅人なり

身をはこむ端中倉の東に山　士朗
笠に日記をし東に夜時に　不卜
鶴もおき月の鳥の帰出す　鹿野
鳴吹かゆくやくをくを　菊所
水にて流星也とる里に　岳格

ウ
ふハ[illegible]しとうしさく 浅簇 士朗
逸も志門逸[illegible]ハ[illegible]意[illegible]しハ 菊所
[illegible]へ[illegible]おく 楓ハおく [illegible] 岳輅
[illegible]門 磨 耶ハ[illegible]根ハ[illegible] 鹿野
[illegible]郷の 碁[illegible] 柳みさ[illegible] 不ト
[illegible]と三[illegible] 帰せ[illegible] [illegible]帰り 士朗
[illegible]とのせ[illegible] 小 [illegible] 五雄
[illegible]の 風 [illegible]む[illegible]の[illegible] 不ト
[illegible]誘し[illegible] 書ハ [illegible] 士朗
枝も[illegible]き[illegible]一すしと[illegible] 岳輅
[illegible]のこやも[illegible]も 誠[illegible] 鹿野

名の木 [illegible]木の[illegible]花を[illegible]て 菊所
[illegible] [illegible]も 陳[illegible] [illegible] 不ト
[illegible]やき [illegible]の[illegible] 菊所
[illegible]ハ[illegible]きその[illegible]を有[illegible] 不ト
[illegible]の[illegible] [illegible] 菊所
日ハ[illegible]一日 [illegible]も[illegible] 岳輅
[illegible]ハ[illegible] [illegible] 士朗
[illegible]かく[illegible] 雑[illegible]も[illegible] 不ト
[illegible]桜の[illegible]人の小[illegible] 岳輅
[illegible]も[illegible]き 堵[illegible] 士朗
[illegible]も[illegible]の[illegible] 不ト

壁の雪ひ方　蘿軒にて　菊に
末母なて月を何とか北志やうな　士朗
風も高安なりとゆふくれのこと、
年ゆうに結合をなる雪の骨　岳輅
一年三時樽の叢をなる　菊所
小屋風に秋の新内やのくらく、
常引つれと唯もかけなり　岳輅
たまてもし又山さえなる　不卜
端内屋にお花すゝきにて　菊所
嵐山三十六章十六章三句
二十章章二句

初雪を發句の端にて端にて青柳の
小雨にまれなる所にて　樹風に
坂やおもはしこゝろ雨庫

初雪のふるよしもの那佛の宿　九岳
ふまくらはさ夜や老木の雪の都　岳輅
宿をかり雪の椿人おかぬ人なれ　硯静
生野内雪二日まくいゝ房の雲　卓池
小埼玉の年くらやまし雪の郭　吐山
青月やむら浮しるゝ雪の門　椿堂
初雪や胡くら房の膳につかし　岱呂

雪の日や君の下行音の聲　玄蛙
藪に居る正月とせよ雪の音　菊所

初雪九章章三句

枯尾花ハ行御の志ゆり海に山に
越るを先とする雪の人にあるを
膽彼淇奥綠竹猗々

枯尾花ひしひしと雪に濡れにけり　不卜
世を知しむ雪ハ見へ江枯尾花　梅間
一ツ家ハ雪の上もかき蹄ぐ　阿城
気をきき鞍ゑしけり枯にけり　大商

[illegible]海にも[illegible]江枯尾花　五道
松風の罩ハ有明られ尾花　翠川

枯尾花六章章三句

水ハ溪の岩の[illegible]
動き風種に古人の心をさへ[illegible]
つゝに月日をつひやすを[illegible]

[illegible]　岳輅
有明や波に浮[illegible]　鹿蹄
[illegible]　士朗
[illegible]　菊所

こ風やちるも法森乃猿の声　不卜

鴨ひとつ鶴まてゝ水の跡し哉　五雄

水鳥の文法の宿やいつら瘦し　推己

水鳥七章章三句

人家を去ること百歩のあなたに是を
たせはこそ行燈の灯まとまといふ
そのまゝの秋ふける人家かくれ時を感
するなり

人家のかくれ咲なり冬こもり　秋挙

蕪焼し世のきうき鉢よ揺よ去よ　松菊

こゝろあるや附るのみかひりけ　大蕪

翠くまの花穴ふさけ夜の皮　湖風

日ころや一木兎の耳のことく咲　左雀

人間五章一章二句四章章三句

七小町は人情を深く得之風雅乃
ありしは生前世あるの事にせ
ぬなり

冬ごもり姿はくさん七小町　錦秀

初まは宗のまめなあまり紅ちらし　竹有

きみかゝし一ち肯は着て鉢たゝき　鴛風

大波の打つ計るなり　おまこぎ　金谷
人傳に寄もえらし中碑浪山　菊所
余無所瀬の寄も寄西ゑの山の望　士朗
からうきを撰に矣岡野の手書ぢ　不卜
七小町七章章三句

東西四歌仙

東西四歌仙

山中　晋日にしれのつゝ月さし雲縁事　経
堂鈴花秀に耳目をよろこはしまつたのむ椎乃
木のむかしに倣ひて丹波なる大山の人ゝしに
椎の葉をむすび鏡坤の椎の実をむろひて
一葉鉢いてきにかりされは月日のいかゆみ人の
の長行水のあとくれかしそれをこの集と云ふ
四歌仙とよ稱そうし

安そうみ清風菴申翁述

花莖とこゝろ東さそ小さ以る　樗堂
蓮の葉をむしゆ春さき　白路
とりしに燕は泉をうしらへ　梧朗
西のにほひ内きゆる山のこそ　武陵
塩焼の深しき月を納にのせ　東眉
ひとかこゝろ拾ふ杠かさ　朗路
新ゆふにおろをよせる井柱　眉
坊走のせいもいふ二日にて　陵
かさみそと人の呉さる檜笠

芒ちらし老らまさり　諸
鶉啼宿の所の里の隣をいれ　朗
あはきにのせる明月の露　陵
鎌倉の名は何とおう吹拂かえ　眉
こそおもいさわぬ葉をのこ蓋　朗
淺にさや夕られの灯をとこし　諸
佛のあるを花をとる花香　眉
つゝいまぬうちから自ふ木葉沖　陵
蓋をふるゝ濤の毛　夜　諸
二ヨ　夜の明る幸洲の高に洞しらを　茹　門
佛にあれと木をたきなり　堂

村雨に何さ清をりを隠すらん　戈　馬
砂とる雨を多に　ちらし色　門
月は何さるかさはあるまつて茅の家　堂
身のかしらしをかさる色達　馬
いあしへの人の情の国に見えて　門
枳の何しし我這入柴垣　堂
渉ましと狸の命をうひやり　馬
枳のかしらの家を打こむ　門
西門と東稱をめつきり秋をし　堂
茅は宿る紀伊の珠数賣　馬
ナウ　小ふろを商ても起ても　門

やはらう廣計事作る山畑　豊
吹おろる居己の雲の赤さる里　馬
其刀をもちを呼る人々し　門
ひとりかゝ星をへりむる花の上　豊
飛まり新都に手の届くこ　馬

生新むる種かことしも咲けくら　東眉
来るもしく来るにとにして芋の蝶　白路
春新芋あらのうくくをうなり　梧朗

年鍛のよるあそよ今れ梅が茶　東眉
夕風や人の語にもちる　稀　白路
陽生の芋に飛つく雀　う車　梧朗

あれし暗山の花あきりまつ
うしくて紙生ハ白宿を来れ
さきしをもしのことも出つけ
なつとふせんとなりともあふ人を
雑波の来まるあらあらし　安
のきりハ原のみとりに送り出つ
あさらくの芋雑おうらあし
うこ折末詰ふれとねむこうす

つくるもこゝや 猿のわつらひなり
むつかしや 花にけさ人何のかのと
今月深津川より 船をかゝるこの
ひかりて流三里まして 左右山松見ゆ
絶壁數丈にて 乱之松生 等さ
まゝる一番ともう 喰すなき 奇名
睡山石の多し 船をつくすにやゝ
まれいふ 浪衣をひたし 来る
志ひて 或ハ 流れ 津河 ありて
嵐山の若大堰川に出る 家人
初ゆ 蘇生のおもちを 後に 橋を

わたりて 都人にうまし くも
越を同しうして 花にむかへる
為 陣又なり
花ゆるやうすといふれぬ嵐山
日にてまひ 花のうつを 勝のうへ

武陵

たゞ 半しの 雅やまゝん 小瓢筆
て 狀にかゝる 五月 為の 志
朴の木のおとしも 相にのひかちて

挟堂
武陵
白路

坂祝ひとへを居るけり更衣屋　拾朗
見きしと云うけさきのうは氷　東眉
神のうへにもきゆるゆるなる日　路
神の白こゆるやうなる清の青　陵
砂に鋭清く一筋けうち　朗
大かさは人に志られぬ菊の花　眉
うらやゆしきは蝉の鬢　陵
笠ちる月のけうりも志をとて　路
少りうへす出は青の笠　眉
青ふるる猿のふくさと孫にのせ　朗
津恒をなしのとゑん雲のもなし　路

むくしと起て目をとる船の飯　陵
青葉意しと云ても鳴らん　朗
義入のうたの雲なる花咲て　眉
遥かゆきほとに春の村の　陵
二月
荷ひ出て坂まけるる鮎網　桃林
佛楽をつんよせ人をしるなり　耕圃
変くし家の株川の名なり　暁浦
菓の花折ふ年わすれする　生
手車に着祖父をのせるゆるあり　圃
やうて日にしの縄をりをこす　林
紛来は弟の乗のちるをうり　生

桑こそさき 彩の 実す　浦
月 遥き 東 夢 籠の山なれや　林
かの 世ふ ほをむいて 越えん　圃
相の 笑ふ 何やら 書て 見せにかり　浦
瀧まいり 書る 大工四五人　堂
少 灯をすかきにの ほる 花の端　圃
栄 世 くふ 紀 房の わら 帰し　林
れ 名 れ 寺 鈴を 来る 裏通　堂
坑の 松 人 ふ かける 名 さし　浦
陰 ふ 花の 末の 夢の 海 常　林
松ハ 毒を ふく む 書 さい　圃

ゆ ふ ち の 晴 ふ 書 出 る 小 座 が　梧朗
き ハ ほ と 月 の ほ 見て 寄 く ぬ ま　白路
庭 る 時の 月 見て ねる や 夜 木 立　東眉
縦 枝 と ま る や 木 の 夢 の 石 灯 籠　東陵
呂 却 く り う ち ち り 居る 杜 丹 ぞ　梧朗
あ ま 行 く り 佛 偶 して 枝 ふ 人 を
古 木 の 夢 さ を 見 よ 夜 明 月　東眉
こ こ ら れ の 中 も 見 申 れ 帰 の 春　白路

錯綜の水を申しまゐる事ぞ　武陵

ゆ雪の上にけさすゝ日よりかな　東眉
さくし汁に紅点の月　成美
そゆしをうさぶめから秋立て　一茶
舩をあかれをすることもなし　浙江
あしの年とり垣のうけくして　一瓢
ウ
鰍鷲六の札を立事葬　文臧
入あも松のけしもみ水泪　心垂
紫黄中に厩のさふらひ　茶
ことし野ゝ稀も出る人笹粒　美
あのこあてるけふのうらかひ　瓢

夕小雨神楽かへりまで伴ふらん　江

萩さきうりに妻を待つく　西

垣さがる六部の月の折ふけよ　瓶

金一のなほきにみゆる下屋　美

ねまられと更てきゝ墓くる来て　茶

大根蒔に梅ヶ香ぞそらに　江

蝙蝠の影月に出入る古の夷　瓢

雅乃枝折にかゝるはさみの　瓶

享

小姫猪に紅の羅へ羅しける　武陵

野分すゞしき事も捨出し　梧朗

抽出は杜母にわく夕　白路

吸ひさしの山のうすのく　眉

福原は時のやつきる紅ふり　朗

その飯のもゝとえくせば　陵

妙婦と舩の名織ふりむる　路

月なき香の気はなふる　眉

秋のる梅のおき葛の実　朗

湯口の垣とぬける拵藤　陵

作道の禅みける影あし　路

こんぬの皺とのそす　祖扠

十夜あみ月ゆかし落る松の煤　朗

野のふれみ新座もかし　陵

近江路の水つまり下結もたゆまひ　眉
　本居る門をまつ浪笠井　路
大根の花も呼ぶ花のうけ　陵
　かけ日新の春のたゞき夷の目　朗

新良に多きをせらひし桔梗が　白路
　をきまゝしるを教えの初ぶ　梧朗
大橋をやうて志申らんての川　東眉

稲妻や浪よけ垣も只一重　武陵
ひとつ御家も志つまゝ砧が　白路
　あきく新止まも箸のかゝりより　梧朗
　えりかれとや何末陰くしかな　東眉
何處へ行人を招きの月明り　武陵
　青くしやうり火ひらつ秋の風　白路
　不つちかと行事ひ冥てひとまゝ蕎　梧朗
稲妻に拾子法ひてる念佛かな　東眉
　落うけて日ハ二度に萩すゝき　氏陵

あやなく月に並へて咲る香　梧朗
ちよ川もとたえる舟の拍子　梅間
畫は世ね大佛茶をつんなれて　士朗
豆の筆の芽をかそえ鍛　森野
あのとい へい旅屋かよろしあり　間
鍛冶のいつも蚊帳をつり出る　桂五
ウ
ま风岩倉の聲ほろ露て　竹有
かくすに蚕に杉ちら雅子　朗
蚊帳かけ菓かあきる區會　好

清水の飯のあか賊とも　間
ちる雲へときおもし人にすゝみられ　五
海に舟乃往るれくり　有
月のさ兒り雲を伐乃丸村道　朗
かるゝの床まにかちてこそ　野
家来を新衣のみしらく乃　間
日ふれし小宮の戸か咲る　五
花ちるゝ一里東の山の人　有
さまれふてち乗いよる兒　朗
三オ
眠るうる蝶のころをたのもしく　東眉
沼の塗かよう柳そうひ出く　梧

往やらう湘かけらる思ふ拾　白路
会を初瀬の山本とさきに　武陵
おかしと五月の暑の一九ろかり　拾
三反ならず飛らく門先　眉
生蛸を人にも入れず賣まけり　陵
土地のよこせ丸呂の城　路
夕貝の花のうへにも蛍ゐて　眉
蓑くむほとの門をさしたる　梧
けとさぬに川瀬をとらる秋の尾　路
ナウ　その朱もひ紅や遷佛の塔　陵
ゑるゝ山のうこちを作る朱俵　梧

賦ゑ上手の雪に　眉
琴ゑるのけらなきものに華させて　陵
雛のうしろへ隠す　路
由るさまさう浮々しきなる花の西　眉
さや灯を掛る月の山吹　拾

宝の月れ手かはしきものも返　白路
都けや一緒しにふ月の月　東眉
きつゝなきにし　接ゑ仕にて

ほうねと蓑笠おかつり
竹ほどに
路あれの空に鐘なる大津かな　揚朗
賎るまみ疫ゆかん小松街　武陵
まのれ乞や京もすかけて年の暮　東眉
たうらしの吹ぬらしてや松のくく　揚朗
偶来松樹下
松はれハ露もはらりと雪みれ　白路
しらぬちれる目もとく花ひらり　武陵

ちはし
秋ぬる人まくぬる方に門かなり　砂童
やけりうえ昼寝ぬ松の緑目　既石
ゑしくるに人ぬちいまれ被中かな　仙斧
雨の秋の面に夕れハ乞ちらし　柳丸
よ物しき坯の卯ぬ不晴人すれ　米味
ゑの外ともひらりハ秋きし　梅の香　羽人

見ほうのまつりや夕霧　長乃丸
苗代に下ての見え山ろ日うれし　東かた 祥木
呼蛙きみ申に入て見ぬるね　八王子 米它
高低や念仏こぼるゝ日のさつき　起石
山水に手をあらふりや椿笠　径山
新月の花咲ぬうちる汲凄うれし　秀眉
囀と鉢にさくらや網　本實
おちの八つも花ぞ一斉の山　香暁
新みてけ晴露の山桜かな　碩尾
椿出て妻もうすらそしむ　決必
かうしゝるへの中々むの花　木海

山吹のぬくとさも八十八夜の日で　路宅
梅頃きのかりうちふ　玄蛙
ちりとの露りもらぬとかしゝ　篤光
雨ふく家と皆寄つかしや蘆鶯　士章
山さくら眠の井にふしゝ咲ながる　五日市 笑九
茶店桜陰に茶摘みたり　分た 伸年
呉の舟やわらびきひかむの声　蘇明
名とめてせうしてる花の遊され　梅徳
七福や祝しの日のさしうる　波一
さし取く裏こむや菜の梅　田旭
若葉やうれひつてもまちよし　梅旭

捌かきの一筋てらて露あかり　卅淀
杉尾あれてるこゝろ中日のか　青我
竹の木をへても寝ざし秋の月　桐園
一わたし出てはゆるりに夜の月　玉屑
そつの月みつし三笠寺　荻薄　標堂
出かうしかみ上なつけ夜の月　大芸
きゝ柳の魚ふうろや秋のくれ　如外
なる雲のすうふ日春の乱　大咏
奥山は露を庵のなさそふ　月化
きゝ山や膝りかくる秋の暮　葵亭
二月をみな春しあり岩の下　南美

萩の秋も明るくなり　桂　まあり　枕里
床かり月　松かぜも風もなくなり　函船
帰り花栄えなくも嗅みなり　霜操
鈴へ留主へ詠まし夜や夷あるゐ　そ白
あとかも気もたほきかあるかな　甫蛾
こゝろ菊や　飾る雪や時あら　灌園
門しの秋も内安き庵られ　馬良
雲の山萩も飛のみ由まある　巍邑
二つより一つをゆし　そら　核　無楽
雨かふみし秋くる時雨の松の声　手英
苗代みつくまめの種たほしなり　如阜

きえのこれやみのからびもけふはけふ　且有
海見ゆるかくれて出すも火桶かな　小菅 橘中
猫渡す湖は南に峰なりけり　雲物
くるしくも月とともにすみて　竹仲 虎
杜宇類にたつるるは青かれし　千尋 玉峨
秋風におもうわかれ秋の暮　一萍
七夕も七日あまりまたの三日の月　子園
初旅や手をさしのべて山の上　米 美
帰るさも又ちらしおりぬめくきれ　相福
野分あきさきたる梅の花　未織
菜の花がみなつるくさにかかりけり　五陽

ちりかりし菊に雨れつつて秋の雨　遅六
ちる袷かなの秋日見ゆるかな　不坊
凡しき立秋もし寒之月　蛇水 春壺
秋みなく皆わかれとさひ月かり　春月
世にいでてまだひとりと遊ばるる　春人
夜半わいまださちて梅かつ　李本
雪のあまの中日の出に月かり　芳那 美
さも帰静もなくや秋の月　千 双馬
菜の花のあつまれ咲てたな　春蛉
乾鮭の目にいれ寒のきかしす　亀庵
秋風のめて来てかりありさきか　吐月

山陰や木の葉にまじる夕時　鷺橋
飯盡にひやりし夜や　鉄さくら　文戦
雲雪の宿に先喚さくらう家　松居
何としてすまね弱を宗る事　十手
夜の杖や河に堰にて浪の家　團先

一重坂にて

清雪や一重にかゝる梅そろ　勤居
唐の杖をせめうりて浪は雨ぶ　（上セン）芝二
卯の花や杖はかれて海の色　（廿六）青梁
夜の山をくり落きは唐の庵　関豊
詩の春を日う志へ初て梅の垣　（カラチ）采種

夜の水々にのわたりは草の上　（十二ハ）寄渕
三りしにかゝねうはたりこゝろ後　米彦
此菴を見に雀を来たう梅の花　長齋
けしきの合にまるや　ゆりの花　友國
そこちほこ山のあさ上和　梅　百堂
彩鳥のひとへにはたる朝日ぶ　尺艾
西月の来るはうまえ梅の花　吾雀
鶯の美にそこなしにて半宗之　春哉
元祿の雪の後之本とくきを　竹為
寒の尾を志たし　切岡雪ぶ　蜂友
花の雪はかさなりて　鳴の海　半輪

行年の木ハ松のことにしたり　春思
夷ゑや　蓋安りとし　山の人　萬和
春のひ下ゑもこゝなりに出しなり　國瑞
やゝ　嘆ゑ　ほこれハ月もなり　瑞馬
こちらうち　時ゑ　むまゝ　松柏　魚眼
登中ハ　瓶もわきれて　こゝ　鈎翁
一日のなのうつりゑて　門清水　志行
丁の時　山陰ハよき　ゑこのり　魯隱
様ゑ小夷をとく　蓄ゑなり　文鳥
半月のあとゝ　菊ハ　嘆ゑなり　井六
行先に　枕ゑ　様ゑ　行ゑ　三津人

名月の様ゑ　なり　流の人　井眉
理ゑを　明月の　ゑろ　ゑれ　銀拗
面ゑ　いうち　に　白さ　む　秋の　月在
栄の　ゑ　秋　ゑ　むつ　ゑ　夷の　ゑ　宗樹（井柳　山口）
意の　夷の　ゑ　ゑ　ゑ　柳　ゑ　才成
一ゑ　ハ　門ハ　ゑ　れて　花さ　ゑり　馬助
ゑ　ゑ　ゑ　れハ　人の　又　ゑ　柳　ゑれ　雲理
帰代ゑ　ゑ　木を　様の　匂ひ　ゑ　年　良水
様の　ゑ　ゑ　人　ゑれハ　嘆ゑ　ゑり　下方
蓋　ゑ　のいろ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　の　茅阜
追ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　田の　者　香澍

名にしや 蓋も 芭を水のうへ　岱李
春の日の少さき根まで入にけり　黄香
鶴の夢のめでたさをしる 菜の　東裡
米橋をはしりし 蔵る 横れ　毛拳
菜の花を日のあしけり山尾　東洋
三条にて 橋の出 なり 鍋にさき　茂屋
川風や 三条にわかれて 嶋 鶴　茂良
河風とも又 河風とも月 河る 枳　双南
あの水にさしぼる 紀の 己ことなり　在世
さて月に 足本 見へ多 呼 鶴　季遠
花さかり 月の枳とまて成かり　尾全

夜やうな月も出々り 橋の花　布雪
清水に紀の清に かゝる 芭を枳　其成
しくまつもうしくまき 名の 蔵を　芳縄
夕 蔵をしきもなく 橋の月　梅價
川 音 紀 えしくなり 橋の花　茂秋
ふくろに 新きし 入や 秋の山　六響
まくちる 三月にこそ 松の月　不泥
春 淡しきなり 嶋も 橋の花　定雅
さみたれにさいし 鹿の木 ゑ　南嶺
花のけて 陰めく 浦の柳 かな　土卵
やう 宿うら 丹波へ 橋 橋　許雪

ふくろ妻れは近江のゝねかふ　寒也

初冬の水音ぞとおふく鶏が　南岳

仁和寺とまりれは樒の花ぞ　雪雄

茶すてゝも吸皮まそめり　辰然

ちり椿ゆれ水のうへにおちり　同嘩

ホみ路傍とこの藤見に橋に　子端

ちりの茶花し紀之介橋の茶　茶帆

あうくもや人の来ておるるの茶　素頓

その蝉くる作者の秋なりとそう涼　鹿跡

花かり日と後山内見木の白　貞山

明日のまゝはちかうしわくらば　京

かゝりの月みもろちもみやこ　梅泉

新涼ほとおいらいさうらに　月虚

秋の秋の足も忘るゝ窓の月　卧央

雪に出れ交れくも隣かゝり　大阜

落葉て是ともれまくらの郷　大蘇

あれそら秋らしかいそう変　卉有

こゝに人は一源かつよ花の山　墨蕉

花姜にも袖やねとりの神たみ　椽間

清瀧とかくれ出ゝりさし独鷲　少秋

よいそしとかけて出するかへ　桂五

秋の日のあけられてまつゝある　岳輪

山寺ニテ

志も云ふも寝ぬりむ見の流れ岩　士朗
きし　峰やまを放れる鶴ぎ　南廣
深しさや枝のいぶちの並ところ　ヱチユ 宇瓊
夷るやこよとの宿も海松海雲　カヒ 有斐
花つきて嫁ハ夷志ところかな　岸外
折枝や私にそれ草九る　漫々
人九分ハ清くり物なり盆の月　お都里
誰人か神おそらく夜秋雪　イセ 鶴守
鴨河と云ふまして折扇かれ　丘蒿
燕果てのそそうれる草屐が　孔阜

あきや大津の宿ハいつか疎し　推巳

訪人不遇

門の月摩びまいて帰りけり　挟堂
さしたれにまわり今せて嶋の海　リ御 木ニ藥
蔵ところおくなりふけり多さらう　梅支
夷然る暇らしう浮木なり　イカ 士得
夷乃水波出んとまてしいけり　猪来
筆然嶋姫雲も　朝日かれ　ヨマミ 仙凡
山と海ところハ大きくて偏ニ雀　水影
それ草にまつ枝然明す在雲が　芳之
梅乃まる目も行ゆ程蔵枝が　千喜

古ちや隔しまでも苔のふ　志う
初梅にまとゝ見ぬ沢峠が　亜浦
雨のうされともこの茅木が　烏頂
残こゝや二舞のひそう茅の雑子　蜃州子
茨子の花茅てよれ茅なりけり　文串
松風に梨されて出たり春の月　素丁
雨雲のさらひしの木樵が　乙鶴
春の枝の梨しろそれは猫の意　宇洋

二月破路三月

花にくるゝ日は幾日にする光の上　申赤
秋風や夜明ても明むすゝき　呉山

うれいへを明てあり花の穂　耳谷
わ春をあ月まで見なり味の様　東文
鶴しは梨もてしかなり茅かひて　眉山
ゆるきよひ夏よりや春の野　荒古
登白や晴をする茅のうへ　蕉雨
らくおゝのしひ出をえ梅の花　何頼
こゆる雪子月枝とあり茅茅山　柳莊
うつひそや浮紡のうさも一様子　素碌
梅にうつるとなれは茅初る　雲串
こしろうち俳人もあり何やめ茅　岸古
秋風の立先人にしかしまうお　卓池

一曇日は志好をせ[illegible]　木朶
ノ歸る夜や折折を笑のうへ　秋峯
ノなりとてうす家にも道の道　乙一
木に清いてみゆるも出し夷の西　冥々
月に[illegible]と志つまりかへる[illegible]　雄渕
松東やすくしのひ方も[illegible]　巣居
くらうう日[illegible]の山[illegible]　ヤマ　西翠
月のかたりとよりれと[illegible]の[illegible]　エト　芝彦
さく花や[illegible]とすれ[illegible]　一葉
四十[illegible]日の[illegible]　文藏
卯の[illegible]や[illegible]の[illegible]　ノ旦

重夷ノ一[illegible]　[illegible]　巣兆
[illegible]　春塚
むの[illegible]生一日むの[illegible]　完来
[illegible]二月の梅[illegible]　牛心
[illegible]　若翁

上聖[illegible]

[illegible]　[illegible]美
夷風の[illegible]　太節
[illegible]　葛三
[illegible]　甫滴
[illegible]　[illegible]秋

名ゝ也 清ゝり上ゝる 井 そしら　鸞十
砂門のたゝれに流ゝて夜の月　由像
こゝろしのゆゑもこせぬ事なり　寛枝
薄月の柳にかよしの顔をかゝ　鯉三
美しき水のかゝりや菱柝　如川
五月雨や由をぬゝぬ鍛冶　井蒜
いれゝろの行きに飡籾菜種が　伊正
時ふきれの浮連新しき角かゝ　慶く
きらくしとせに蕚えへて金の月　野鴿
一葉いゝ洲さえゆれ桐柳　勇虎
行とあの姉しいりのよ初さう　春亭

下京や志ゝるく中を葱賣　一勺舎
ゆゑ着りをゝり立こむしられが　其屋
乗しや着ハかゝる浮夷の為　甫州
末尾のおいのやうに和ほ五月　魚陸
速報のほゝしのひてまゝりが　凡涼
寄乃参ゝ行此辺の小松が　坡蓼

宗ほの山にて

山塚の嶋やてらくさ浮日行　滄洲子
すゝみる世にかくまゝすみて梅雨　魯縞
猫妻の山にしのおくゝ夕ゝれ　東趣
ゑさゝれ塚ハ嶋ぬもよりゝり　涼平

夕立やそれより先に蓑の風　左鎌
鶯鳴音に入そうお小寺かな　陶三
蛾の日もかたふきて老の坂　杜高
一時雨志くれてもらう小船が　馬雄
ゆるゆる人のなるきかけたる柳が　辰義
廣しと秋の明るけ青田が　五柏
湯出やゝ行かも見ゆる京の人　起夫
山まうに老くなりかけ桜の風　東亭
まゝ風の落ち京の夕の水青し　青兵
春風のゆらしなる花く小松が　うの女
粉て原しまつ浸ゆうなく鳥　魚文

のゝ鶴時鳥ひの外に動きかり　丁巳
浸さう春雨も一日大根引　岡眠
蔵の矢の目こりかゝるや多籠　兎白
稲妻の雨にもなるか松一木　壺石
名月や人にといふ笑の唐　少波
お露の柳に並ち柳かな　枝青
笑やせ来て鑿ゆゑ里の夜　眠皋
水仙の笑に案気なきほこりが　魯州

閑居

咲いこそ人も向来れ橋の花　美瑞
鳥の青月の夜ふけ涼かり　文風

ぬき書

梅一木そるゝ花てらし佛の奥　保吏
あの頃の落ちけり咲て冬牡丹　斉周
うたゝ寝の手を付離しる秋の風　田静之
見るうちいお餞まし紀のや淡の花　立谷女
えゆや あつきの志おと華えるあ　加賀いくめ
五月雨や雲に火と黄山の京　九仆

ぬさ實

何るの山あれたるゝに松をひたるゝ事と
すさしし良さしむけさるんとハ大かしこよ
のたりふるの付るきそ年文化辛未のとし
みちしおそひたちゝ神話山に何ゆゑ
をそこなんと云しゝ是ハ信る甲斐の
縣を出ゝ事なれ何る鈴山何るの深志なれ
なるしき山路を踏ゝ御東海道をたゞ
先を過すゝ駿河の国沖津清見ちに

詠ゝ其筆を添に投ゝり清見る 三保のさき清見ち
なとつゝに一口にいち来れたれハさんかりとそ
おりひまゝられて松のひかりし三保のさ
きに清見ちをそゝんとせしもいれ
かさなりしかしことゝハさなから
間ゝ海をおけり三保明神社
松風ハ平ま江 剪生の芝ゝ久能山ハかけまくも年
月おそひまゝりたるに松をひまけり
ゝ只さゝ平 岡口しり宮ほの山ハ
宮ほ山に茅を帰り出るんなと心
おそ紀かきりゝしもいつのむかしの

海辺のおもしろや河のくん　雲うけに来て　さうれての山
大井川は只ひとりのひ合されとも[illegible]
日にあひて又のとゝまるもし　[illegible]
すゞしや　涼さを小舘も　しらや大井川なれ[illegible]
とや遠江乃かゝ権現の秋まふ山ゝ諸の清山え
よろ年の[illegible]境亡して一字ものろうなとく
掛のひさや　此御神のよもさしてこそ涓滴
青苔はうらしぞ　出る神の跡　三河　玉すゞ山とも　歌算の文
字ある川ふ出て　文字を摺ふるかなり
ぞの硯の字とうりて　旅人にあへうらし
風来与　あきゝ[illegible]　唐土乃晴らう徒の声　業の硯山ふ
閏さく紙帛

卓池を誌文

見売に出ともす春の中へかな　卓池

坐石の紀行に詰

夜の月箕墓つまとて人の行　岱若
箏のさゝへ掛ひらり菜の燃り　秋恭
稲妻や袂の下の鳥島　浙江
五百時や田ふしま早苗松の埴　梅豊
行年や門の枝の五六丈　月船
来にけりとふさ決彩日うれ　夷嫁
とふ家の蛇藤の色も青そきし　松乙

[illegible]　方斛
木啄も年の[illegible]　幽嘯
雉子打ふ[illegible]　國村
泡雪[illegible]　有圭

茅房

[illegible]　太節
七夕の一夜ハ[illegible]　龜甚
よみふる[illegible]　[illegible]
[illegible]　湖中
年月の[illegible]　五来
山ノ[illegible]　紋来

初[illegible]　淡水
[illegible]　小二

高野

晴[illegible]　雉啄
[illegible]　桐栖
[illegible]　野松
[illegible]　玉珂
[illegible]　其堂
[illegible]　葵亭
[illegible]　鷺白
[illegible]　木甫

尾張名古屋かたりや五雄に宿る朱樹老人
の病はきしにに似てそんな家にしかりて即日
枇杷園に無行す駿河路遠中の句

汐畑に舊 帰之 夫の面 有斐
我に鄰のきしき まるくまき 士朗
鞍壺にもたれて居まは木瓜咲て 五雄
朔日月をかしかられたり 斐
居まに早さの殊る芝の居 朗
松わりさしき秋の聲きく 雄
砂川の口まる船を入る日干 斐
たしら松子の底にうつらは 朗

松子の家にもいそんかり 枕 雄
むらひ合干 今津 益 かる 斐
鯖の青 帰されは詩につくり 岳 輅
稲の香 穂のすゝし月かけ 雄
人は飢ひ居はまゝく莊枯投 朗
ひゆゑ方 とてぬ年まつりが 輅
むらゐに古きまつりとる折かは 斐
花のやはとと舟と流に多る 朗
坪梨山に三度の居まは八幸義 雄
三ツ としくそ有る几中の居るこ 斐
とやくしと法界門のたしら建 輅

水のこまりを埋る板の葉　雄
一ハ月にしらひ出せハほとさに　桂五
貧ふ自慢のつきし明ゆき　絡
生燒の鮑に膝を立直し　朗
ふ二と打出ふり沢の波　五
黄ふ輪の屋ゑに風も見えぬ　斐
翌ハいなり行果る油火　雄
入月に網き佐と行ふ　軟
ふやかへらん玉むしの息　朗
つくらる志賀ハ木の雪と成り　雄
淋しさやんて翁の口とさに　斐

十四

夕ハまハ思這ゆる小神樓　朗
同ゐてゆく鐘の聲く　絡
玄猪うと取ふを門に犬のおる　斐
大沙まかりの徒ふさくかる　雄
櫻の木に餘ゑほくしむさる　絡
ふゝろやしりに巣を作る　斐

庫上一線おそり出

候出ほど月をもまゝぬ樹が　桂五
夜ふ松のうつゝを夢のさゝ　岳絡
啼くしき夢井にとゆりゆり　士朗
明ゆり雲も桃の美ゆる　井き

神の乃や一段ニ風なき梅の花　五雄

甚目寺ハ社殿の造営ニして境内すこふるきしうるすゝろかくひろる所之は呼て弁財天ま津ノ国の弁天みとりてと称おろてぬる所て持りひよせるゝ今日ハ入り　秋は八や二十九日の伊勢路にてハ酒呑昆蒻ニ麦のうれりのこのはで裸そろふあふるもいまそろうて参らんしまゐらかゝる神路山にたゝとかうして何のゆかしときたやけしたうにけあきにうつ潤を飛すのを

外宮　詣みち松に桜の木のたゞ

内宮　松桜の鶯のひもたかまり

浅香（てりてはとまもろ浅香山）　二見の浦（二見ハきん浦とも）

天の岩戸（関にあやまし）京今の柿の白ひかれ　松田も兵士大弁

の地形　徳田大え清精人など訪ふ

月さしや七ツ枝ふ堀のうち　霍鳴

春よみ来る明きや梅の茶畠　桂堂

小楢の又ふくれ子乗ろうろ　南江

やくしの東ね杉本への花の里　丘高

松田筆紀中

宗なしの花のちるまつひろし山　文角

木母ちのはるきき咲きり初時雨　玄蛙

風の夜すがらひかる　枯木が　對牛
かなりけれ月の出るなるなる　芳之
舟の飯熱なるなり　雪の中　烏以
砧うつ息をこ世なり　花の中　弓雄
月の秋のよりかきなり　桃の雪　耒耙
朝なけハ来らるゝ　鶯や　かんこ鳥　蓬宇

宮城師

忘月しきて又ゝ春なるハ花も咲　栗里
桃屋に酔も　なるゝ帰る　蕉雨
鐘の声　掃なつめるなる　挟　武陵

鶯の朝ゝ　のもなるゝ　火桶の　鞍凡
其も山もこゝろに青む　こゝろが　其笛
雪の雪の雪をすつや　女王の　仰頼
子紀帰といひなり　刻木舩　篤光
花の切るきのふをるゝ　雪の家　蔦女
雪月のひよりつきや　門遊　可省
蔵をを忘れを　花のおしゝ　乙二
夜の秋を　殺まるなり　山の奥　有篁
笑なり　葉も　甘記の月の　八日が　魚心
山澤や　鴨帰水のふりかゝり　春唄
山里や　五月なしゝ　雨の　葛三

[illegible]　左琴

[illegible]

[illegible]　一左

[illegible]　乙堂

[illegible]

[illegible]　翠川

[illegible]　推己

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　苦路

[illegible]　士得

[illegible]　芝窓

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新函町徳屋家と詩

紫ゝ年ー　松とてゝ日の白ひとり　杜口
山吹の雪も淀と飛ぶ　左禽
大和詩へとりて　見や夫の雪　綻駕
永き日の鴻列之勢　田のもし　梅龍

初瀬にまゐりぬ又なく道うり初の梯にて
たゞ去るし法名をかつてさるや山のこれ
青柳の裾より詩る　多武峰又見に堤雲上人
の廟にうり南ゝちに詩る　[illegible]
越へるんひとなき岩うしをふゝ[illegible]て梅津
の[illegible]の[illegible]　[illegible]の声

天ゝちゝ履に鼻かゝし城をゝめつる[illegible]
たるのゝ　[illegible]　掃盡に材の木もゝえ
を[illegible]に[illegible]根崎橋
松田を詩

ゆ月の門田をフの夫婦が　竹舟
一様も月あれ水をなりけり　米彦
籠の[illegible]葉何[illegible]なくに[illegible]て　壽渕
[illegible]入りひとし山　三津人
日の入しも町[illegible]　春人
[illegible]　釣翁
[illegible]　外流尼

理ちかくに住をすむやく今朝の花　魚眼
世をかりそ立そふさ毎や女ちかく　魯隠
傳こそ弄月の垣祢花にし　長森
神毎にとりつれやまし毎のも　鵞雪

佛前清月貼中

春秋夜の月に眠しき井田ぶ　抑荘
禮志ゝ神や今夜ん洛訪の御　微席
靜佛や鏡をのこゆるるの上　牛後
寄すくや鳥のましろこそとんで　吐丈

志ろくや鏡の清ゆる　掾乃宿　暴雄
志度居ゝ今木もいりにたいりのお　玉屑
家かしゝ此清こそて来ていい峰に今　雄渕
卯乃宿に燕の巣立山家ぶ　介亭
夫えしゝぬき掾へとゝ其家ゝ殿　木海
町して南瓜搜ゑ月枕ぶ　素口

淀川船中　昔ろとゝ所ぬ　さん掾のれと　朝に入ず　伊勢にて
聖川ゝ石にいつかひにまつて井四条ハ木卯ゝ清
と会り更とさしいてゝ弱ゆるゝ今ハ此主
故にいつて其の掾の宿ゝ清ゆるゝとゝ和されと
聖川ゝ一口も他なしとてとゝくハいれ何方も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日[illegible]　日ハ[illegible]　[illegible]の[illegible]

[illegible]　有斐
[illegible]　布吉
[illegible]　盛李
[illegible]　蒼机
[illegible]　吉
[illegible]　斐
[illegible]　机

笠庵の船ハいつをかしらさる　李
かんとまつ小と南に飛歩行　斐
袖乃下かしかうとえ今日　宮
ふ着ふふ行ものくみやしろ　秦
山名夏景ふしのくまの　扎
陰て春ゆきも色いさいしく　宮
繋田の小橋を伏むろひやう　斐
一生を新のたうるしさ舞　扎
ほつりしと草さ紀出留　李
花のこと大かそ化まみしく　斐
ふれ本しの飯のすくむ児葉　宮

菊 冬ゝ漫銚中

夏の扶や秋 勝まてハ月も来る　六 書
けし姫乃ゆをいひけり扶のふ　素丸
草木の花乃ゑ止んて来る生きが　巣兆
十五夜と雪て来ゆや秋のふ　みち彦
鐘乃ゆ生ふ事ゆとまゆる　雲岡
ふ今日も扶菊ハ草に生しけり　一之
ふ梅や紫をへし打手のさき　岱李
ふりけりと玉中落とり梅のふ　夫蔓

月居
布雪
蒼比
其成
得終
雪雄
成美
書翌
博堂

十月十五日の夜こゝろ玉の上　論之

彩の名誉は様の名誉にふるまひて行ふべき
あり比べ　ふるまひの始はつゝしみて
一面ふりかゝるみ国とこゝろこゝろに
研て研ぎすんとこゝろにそれ本当とは
法法那こゝろ師おしこゝろ
人と結びて多数の徒しさ嫌さとこゝろ
きのこゝろ結へきあをえのみ　若人
寸刻して時くゝ成や夜の月　其齢
夜の秋はこゝろ月まい夜く　素樂
源義のこゝろとそれまて夜の　田年

清親の夜咄し

勝相や　男を志れぬ鶴の夢　有斐
世にも志れかに乳遠ふころ　素榮
桑の木の土まくたに葉を出て　長又
志ゆひし　明る　朝の雨を　松乙
うそうそし　心のまゝの月のみ　榮
薪さられは初ありし　吹　斐
ウ　腹ゆたり多くの手を味あり　乙
日主ありしろく人ありし　人
あまかるに老の月暗を呼すり　斐

夢をうたさかし　赤裸ぬく　榮
かくしたる長さは身に残こらん　人
柚打出さう　逆うへ　う事　乙
同ふものの木　横にたらぬ月　榮
沙魚にとり　清く　初桜の芸　斐
砧うけ　いとゆを　嵩にうしてまり　乙
美へそうぬる　伊賀の里乃名　人
花の香にひとりこそ　三十日迄　斐
子供をよせて　まゝ　埴きく　榮

心のすゝ雲のたすかひまゝりはしめ見たりける
ゆうかう文を　帰ふの情をうしぬさるから

風にすゝりてよらし入いでゑるとつる
より花のこりふぞ杖の名残はちまる墨と
そゝろう飛出しぬ
淨圓寺内安全なる桃ぶいさゝ小鹽河と
しら坂くしるにも流れましてはまゝ
六条にゑ旅つゝゑ

第三日 晩附

灌佛と共て揮之合り月宿 有斐
月みし 蕣子のゑ錢かより 久飄
あなうき舊の康入憐もなし 斐由

傾くしらんまゝ音の止つく
十夜の門とゑきむねて
木綿の光にともる山ゐ
蜀風のくしくふらて杖のすん
炭の旅きいふけ留坤
咲とみゑしゐむさゑつれ
いつの間ふる身の挿しくゐる
人目ゆきぬけてかよりて国の雲
圓果とゆゑそらぞえ一夜
月の入時分ふなり、旅ゐ月
汁の実やきにゆくらん

斐 飄 由 斐 飄 由 斐 飄

鐘の聲つゝみ初てめづらし、　中
それなりけり佐の宮奴　婆
菓を作る亂もなるに百三日　孤
療し晴る上えの聖　中
三二 髪の毛まじしみて済る　作
起てゆしれい中わしつゝえ　婆
寂座おゐのふ行々会の渡　作
いゝもやきしき住と見初る　婆
入梅の曲く空とさるめ波落　作
常に流る田の中ノ川　婆
峠雀そつれ連とつれて飛ぶ　作

青きゑみと着てる落つ　婆
ならんさぬ悲根のほとわりの樹　、
紅あるやをと拝し久し　作
登るみ日影月の月の積るら　婆
わんとの声の跡なれそやぬ　作
あぢ 此まふ不諦もすしき龍田姫　婆
よく疲者とつられて来る　作
わそしろさ深舟にまさる姿　婆
そみの名のか試る地ぶ　作
末ぐ代て花の下の一ゑきり　、
小さき鐘の聲ハ立まる　婆

月淨し光の鮮のフユ松を　真雲
折雲とそらに見えて時雨が　如翠
庵居りの一本に匂ふ菖蒲が　箕由
冷しとは今姿の鋭を見　太圭
夏秋月に種て見る櫻木を　方居
夕立やよりしこれは相一葉　石口
夏秋月にて見えて葉の匂ひ　五来
神示男の鼻にてくらう松の風　茅鳥

折年の友や投やこ壳卵　亀長
さらさらの中の小船や給訪の船　玉水
京てゐる葉さくや比叡山　物茅
芭蕉葉にあらはれ麻の聲　塩方
夷の秋の草のゆるむや茅の宿　渚水
鼠帰宿を藏さ見て夏秋月　玉恒
潜伴や混て見て山鳥　小海
七夕のちきりこほれて茅の家　玉親
十たり暁ほしきみてこれ　一作
麻の魚明やこれ松を成ふなり　亀石
稲船とつくりこれは三方のこと　久孤

霜の日やおしとくさ峰の松　漫々
折て来る目に乱ちるや我木兵　艸丸
麦蒔き杜丹に風の見えにけり　藻狐
不紀日記の月松くしうれ　可彩里
行松乃ながらも夜あれなしに　桂文
時雨消き手洗ふなうれ雨　椎村
草鞋かせハのとる菖蒲の百ひ　巴岡

睦しく十三月　發足
三月　二十日　洋岩　有斐